

文献紹介

E・J・キング 編
鈴木祥蔵 監訳
西村亮一

「社会主義の教育」

宗 孝 文*

1917年以降、ソ連の教育が何をめざそうとしているのか、またそのねらいが、いかに実現されようとしているのか、また同じ目的をもつ東欧諸国ならびに中国が、それぞれにどのような制度として、教育の中にその目的を生かそうとしてきたのか、それらは、ここ何10年かのそれら諸国の歩みの中に次第に明らかにされている。

しかし「自由主義諸国」と共産主義諸国との対立の中にあって、それら共産圏諸国の教育の実状は、ある時は熱狂的ともいえる宣伝をもって紹介されたり、またある時はそれを攻撃するための批判的な紹介のされ方をしてきたものも少なくない。また、特にソ連の教育は、もう13年前のことになるが、スプートニク以来一段と世界の脚光をあび、その結果、政策的なことを中心とした紹介のされ方をしたものもあった。

そういうなかにあって「社会主義の教育」と題される本書は、社会主義諸国の教育を単に宣伝的にとりあつかうのでもなく、攻撃的にとりあつかうのでもなく、また競争のための教育政策だけを述べたものでもない。編者が序文で述べるように、ここでもくろまれるところは「(

事実以外の) 何ごとかを説得したり、信じ込ませたりしようとするのではない」のであって、それら諸国の教育の現状を知るための、客観的な資料を提供するところにあるというのである。しかし、ただ単なる資料提供ではない。本書は、全体が12章に分れていて、それぞれをヨーロッパの、専門の教育者たちが担当しているが、編者であるE・J・キング氏は、比較教育学者として有名であって、ここでも、その比較技術をそれぞれに十分に駆使して、社会主義諸国の教育全般にわたり、その長所ならびに問題点などを卒直に述べている。つまり、社会主義諸国の教育を、ヨーロッパの眼から比較教育的に考察したものというのが、本書の特徴といえよう。それがこの度(1970年1月)鈴木教授を中心に、訳了、出版された。以下、この本の紹介の意味で、その内容の1、2をとりあげてみようと思う。

さて、各国の教育の実状を比較しようとする場合、まずその一つの制度の支持者たちが、何をその最も特徴的な性格だと信じているかということを見きわめることが重要である。では、共産主義諸国の教育のもつ特徴的性格は何か。それをこの本ではこうみている。(第1章「共

*関西大学文学部専任講師

産主義教育におけるイデオロギーの概念」)

「共産主義諸国の教育のもっとも顕著な特徴の一つは、まさにそれが、すべての教育上の目的や教育的関心を包括していることであろう。子どもたちの訓練を通じて未来を形成するということは、教室や実習室をはるかに越えて、社会にまで拡がり、さらに、あらゆる種類の人間関係についての考え方や受け取り方にまで拡がっている一つの公約なのである」といえよう。しかも「マルクス主義の教育計画の真髄とその強さとは、見ることに、信ずることに、希望をもつことに、そして決意すること、などに対する諸影響を結合することにある。学校制度と社会的協力とは、できるだけ多くの市民が、積極的、建設的にその『弁証法的過程』に参加しようように企画されている」のである。こうした「人格の認知的、能動的、美的、および情緒的側面を整合させ、相互補完的にしようとする」イデオロギーの概念が、マルクス主義者の考え方に本来備わっていることを、まず編者は指摘しようとする。しかもこうした概念が、共産主義体制全体の中において、統一的に、しかもきわめて効果的に生かされているということを認識しておくことが、これら諸国の教育を観察し解釈する場合の、一つの重要なカギになるであろう。

この点をもう少し具体的に、教育体制についてみてみよう。今のべられたことからわかるように、ソビエトにおける教育は、親がその責任をもつというより「国家が子どもたちに対する第1の責任を負う」ことになっている。ここで考えられている人間観、たとえばそれはこういう表現となる。すなわち「人間は人間自身が世界の創造に積極的な役割を演ずるものであり、人々が自分たちの生活の諸条件を完全に支配するとともに、歴史的に設定された諸目標に

向かって今日の世界を変革する仕事に参加することが、人間にとって最も本質的であるということである。」(第10章「ポーランドの教育」)こうした人間をつくるため「未来の市民がもたねばならない理想像と、つくりあげねばならない人格や性格の理想形とは、国家が決定するのである(第3章「家庭と学校におけるロシアの子どもたち」)。しかも、知識教育、技術教育、シツケ、体育など、教授法、教材にまで細かな配慮がゆきとどき、幼稚園から大学にいたるまで、ほとんど完ぺきに近い、体系的な方法が確立されている。しかも、学校内だけの教育計画におおらず、ピオネール、コムソモールなど青少年団体による、学校外の教育、あるいはその他いろいろな社会教育施設はもちろん、百貨店や書店でさえ、青少年の教育のために、一致した目標をおしすすめているのであって、まさに「共産主義社会は、その社会全体が一つの膨大な教育課程のうちに組み込まれており、学校で行なわれているのは、そのほんの一部だけ」という、強大な教育機構をもっているのである。ここでは、その目的において、学校の内外を問わず明確な統一があるのであって、その間の矛盾はないし、またあってはならない。共産主義のイデオロギーは、まさにこうした教育機構を通して明確化され、純粋化されるし、また逆にこうした教育機構は、そのイデオロギーをいっそう強化することがうなずけるのである。このような過程を通じて、共産主義はもはやソ連の歴史の中にしっかりと定着しつつあるように思われる。

しかしこうみると、共産主義社会は「一般に西洋諸国と比較すると、はるかに画一性に重点をおいているが、子どもたち自身は楽しくやっており、暖かい親切と我慢強くしかも慈愛に満

ちた配慮の雰囲気にも包まれている」のも事実である（第3章）。また、やはりイデオロギーにおいては、この完ぺきな教育機構の中で新しく組みかえられてゆくとはいえ、ロシア人の親しみ深さや歓待の中に、また個人的な会話やユーモアの中に、あの「広大なロシア気質」といわれる、伝統的な気質は感じとられるのである。

（第4章「ソビエト教育における伝統的なものと独自のなもの」）

ところで、ここにいう統制ということであるが「それは、知的、技術的な生活、および（可能な限りでの）美的、道徳的生活に対する全面的な統制である。そしてそれは、政治、生産、投資、学校教育、教科外活動、広告、さらには読物や娯楽の端々にいたるまで、すべてを統括する党の権力に集中されている」のである。

むろん、ここで権力という場合、単に専制的な個人の権力とか、プロレタリアートに対する国家的な搾取などにみられる過去の権力と、集団的諸目的のために行なう社会統制としての権力とを区別して考える必要がある。マルクス主義者たちは、後者の権力という概念によって、あらゆる生活を統制していると考えよう。また、このことによって、社会主義諸国の教育は、すべて統一された目標に向かって、学校の内外の活動が矛盾なく行なわれることができるのであり「学校と生活との結合、認識と価値と実践との連結、すべての人々のための新しい文明の建設に積極的に参加しようとする献身的な情熱、さらに、工業化された生産力のあらゆる利点」も生まれてくるのである。ここにわれわれは、社会主義諸国に感じられる、教育へのすばらしいいきどみをもみることのできるの

である。

しかし、ある社会において一つの特徴として

見出されるものは、それが長所あるいは利点であると同時に、同じようにそれがまたその社会にとってマイナスとなり、危険な方向へつながっていることも否定できない。本書でも、そのような危険を指摘することも忘れない。すなわち、共産主義国の権力の中心の位置、共産主義の中に、イデオロギー上の基準が効果的に祭りあげられ、しかもそこで語られる事実や真理が、すべて「自分たちの側にある」という、心からの確信に民衆が疑問をのこさないようになれば、イデオロギー上の権威もあわせもっている党に対する法外な神聖視も生まれてこよう。そうなればまさに「党は、歴史を正確に認識するための保証人」でもあるし、現在、あるいは未来に向かっての強力な指示を与える指導者ともなる。しかしそうなれば、プラトンがかって、国家の保護者たちには「神話」のみならずまた虚偽によっても民衆の従順さを確保する必要があると考えた意味において、ソ連における「党の指導性」という概念には、重大なプラトニズムの危険がある」と編者はいう。また、党の方針と違わないよう、あるいは他人の考えと違わないよう気をつけるというやり方は、少なくとも自発的でないだけ、消極的な画一主義といえるであろうが、皆が自由に思い通りにふるまいながら、しかもだれもが同じことをやっているという積極的な画一主義あるいは自発的な従順さのなかには、まかりまちがえば、逆に人間の自由がある少数の者にうばわれて、しかも民衆がそれに気づかない、重大な危険があると考えられるのである。

一つのことにはやや立ち入りすぎたが、ここでは、社会主義国でもっともその成果を期待されている総合技術教育（第7章）や、集団主義教育の実状にもふれなければならないと思われ

た。しかしその紙数がない。また、独自の体系をもつソビエト教育心理学（第3章）、その心理学にもとずき、能力別編成や進学の際の選別もあるべきでないと考えられながら、急テンポで工業技術化した社会の現状にあって、実際にはそれもいろいろな問題点、矛盾点を含んでいるということ（第6章「ソビエトの学校における選別と分化」）、あるいは強大な教育機構を支えている、膨大な数の教師たちの役割（第5章）、あるいは高等教育（第8章）、また社会主義諸国の中で、東ドイツ、ポーランド、中国（それぞれ第9、第10、第11章）の教育についても、それぞれこの本の中に詳しく述べてある。すべてこれらについては、ここでへたな紹介をするより、本文をご一読願いたいところである。

ただ本書は、初版が1963年に出ている。したがって、ソビエトにおいてはフルシチョフ以降について（例えば、総合技術教育の手なおしをはかったフルシチョフの政策が、その後再び変更されている）、また、中国の文化大革命が收拾段階にはいった現在、その革命を通った後

の、中国の教育については、無論ふれられていない。しかし、社会主義教育の大綱は変わっていないし、またこの本にその点は十分にふれられていることはいうまでもない。

最後になったが、この本の訳者の方々は、社会主義の教育の研究にかけて、すべて日本では有数な方々である。「あとがき」にもあるが、それぞれの方は、ご存知のような大学紛争などによる激務の中にあつて、なかんずく監訳者のお1人である鈴木教授は、紛争の最も激化した期間に学部長という要職を務められ、なおまた、もう1人の監訳者である西村教授は、全く不幸なことに、その間に逝去されるという困難な事情の中にありながら、この本は訳了されている。

激動する世界のなかにおいて、従来の日本の教育も何らかの形で改革をせまられている今日、いろいろと貴重な示唆を与えてくれる本書が出版されたことは、きわめて重要な意味をもっているものといえよう。

（福村出版）